令和２年
冬

木曽三川　歴史・文化の調査研究資料

KISO

2019
Vol.
113

下呂市

下呂温泉街の中央を流れ
湯煙も立ち込める飛騨川

地域の歴史
下呂市萩原に残る水神さま
「金光明経塔」と「水除経王塔」 1

地域の治水・利水
飛騨川支流・馬瀬川の環境保全と地域振興 3

歴史記録
地域と河川　第七編
七郷輪中を取り巻く諸河川の改修
ーデ・レイケが設計したカルバートー その二ー 5

研究資料
昭和２年の木曽川
美濃加茂市民ミュージアム　館長　可児光生 8

下呂市萩原に残る水神さま「金光明経塔」と「水除経王塔」

飛騨川沿いの平坦地に住家や耕地が発達してきた岐阜県下呂市は、河川との高低差が少なく、洪水が起きると田畑が流され家屋に濁流が押し寄せる氾濫常習地域でした。

鎌倉時代から続くといわれる下呂温泉は源泉が飛騨川の河原にあったことから、江戸時代より明治時代まで幾度とない洪水で湯壺が埋没したり流出する被害を受けてきました。特に明治二十九（一八九六）年に起こった大洪水では源泉が土砂に埋没し復旧に十数年を要しました。

本稿では、萩原地区に残る二基の水神さまから、過去の水害を振り返ります。

桜谷のお不動さまと金光明経塔

一．飛騨川の氾濫に悩まされてきた下呂市

江戸時代に飛騨街道・萩原宿を中心に発展した萩原は、この地方の中心地で明治には益田郡役所が置かれ、郡制廃止後も県の出張機関が置かれてきましたが、たびたび飛騨川の氾濫被害を受けています。

『萩原町史　近世編』の災害年表によれば、最初に洪水の記録が見られるのは享保十九（一七三四）年で、以後短い期間で一～二年、長くても五～一〇年の間隔で飛騨川及びその支流の氾濫が記録されています。享保年間は、飛騨川上流の南山方で大規模な森林伐採が行われた時期で、享保十九（一七三四）年の大洪水と以後の出水は、南山方の濫伐が一因と考えられています。

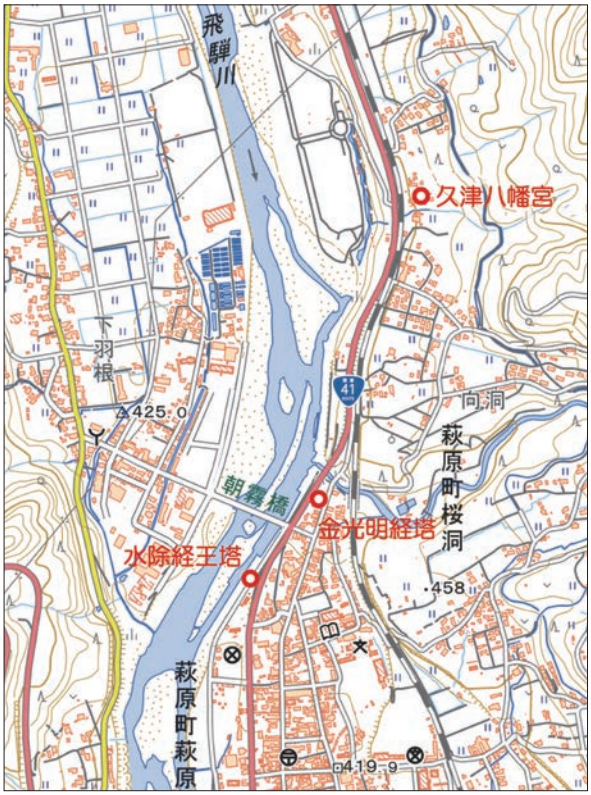
萩原市街地の北にある久津八幡宮は、平治元（一一五九）年、源義朝の嫡男・義平がこの地を訪れた際、鶴岡八幡宮を勧請したと言われています。

この久津八幡宮の拝殿には、軒先に鯉と矢の彫り物一対が施されており、最初は鯉の彫り物だけでしたが、この鯉が洪水を招いたので、洪水を鎮めるために後に矢の彫り物が加えられたという説話が伝わっています。

こうした洪水氾濫にまつわる伝承は、河川氾濫が繰り返された地域で、民話やことわざなど様々な形態で伝えられてきました。

近年は、全国各地で河川の規模を問わず想定を上まわる降水量による氾濫被害が頻発しており、こうした伝承が地域の特性を知る貴重な情報として見直されています。

萩原にはこの地が洪水に苦しんできた歴史を伝える水神さまが二基、祀られています。



萩原町周辺図〈出典：国土地理院地図（部分）に加筆〉

軒先に鯉と矢の彫り物が残る久津八幡宮

二．桜谷の水神さま「金光明経塔」

下呂から萩原へ国道四十一号線を北上し、朝霧橋を過ぎると、右手に立派なケヤキの大木が見られます。ここは桜谷のお不動さまと呼ばれ

金光明経塔（下呂市指定史跡）

て親しまれている桜谷不動堂で、大ケヤキの近くに「金光明経塔」と刻まれた石碑が佇んでいます。桜谷は御前山を水源として山中を西流し、朝霧橋付近で飛騨川に流入する谷川です。桜谷の堤防が切れて水が入らないように、江戸時代に水神さまを祀ったといわれています。

水神さまが建てられた経緯について伝えられている話では、「今は萩原にはおいでんが、下の与六さまのところで建てられた」とのことです。与六は、この地方の名家・今井家の先祖で、与六の子孫は、ご先祖さまが建てられた水神さまに、お彼岸や盆にお参りされていたそうです。

今井与六は、桜谷の堤防が切れると街中が危ないと、尾張から城の石垣を築く石工を招いて、頑丈な堤防を築かせました。さらに安心できるように、ここに水神さまを祀ろうと考えました。遠江の秋葉神社に参って、千両の大金で「金光明最勝王経」を請け、その功徳で水害から街を守ってもらおうと経塔の建立に着手しました。しかし、経塔の完成を見ることなく、与六は亡くなり、息子の与容が与六の意思をうけついで、文化四（一八〇七）年十月経塔を建立しました。

金光明経塔と刻まれた水神さまは、桜谷口の要をおさえ、水源の御前山に向かってにらみをきかすように立っています。

三．朝霧橋の「水除経王塔」

朝霧橋のバス停に、飛騨川に向かって流れを見守るように「水除経王塔」が立っています。桜谷に経塔が建立されてから谷の堤切れがなくなったので、朝霧橋辺りにも水神さまを祀ろうということで、文政二（一八一九）年に経文が書かれた石を埋め、石碑を建立しました。

それから幾度も飛騨川の堤防決壊がありましたが、不思議なことに水神さまの辺りは水がつかなかったといわれています。太平洋戦争が終わった昭和二十（一九四五）年には上島の堤防が切れて、福祉会館まで水が流れ込み七軒が流されましたが、水神さまは無事でした。

しかし、益田橋や円通橋が流された昭和三十三（一九五八）年の大水害では、朝霧橋も流失、一四〇年にわたって市街地を守ってきた水神さまも流されました。当時を知る人は「みんなで川原を探しまわったけれど、なかなか見つからなかった。二～三ヵ月も経った頃、老人がグランド（今の萩原警察署付近）で見つけたとかで、皆で大喜びしました。」と語っています。

飛騨川のほとりに建つ金光明経塔

見つけたのは川原で遊んでいた小学生だったともいわれています。堤防工事を請け負っていた建設会社が、粗末には出来ないと、今のところに祀ったそうです。

水神さまが見つかってからしばらくは、お参りする者も少なかったようですが、バチあたりなことをしていてはいけないと、日を決めてお参りするようになりました。老人クラブの行事として毎年お参りされたり、六月十五日に大覚寺に頼んで、お経をあげてもらったそうです。

近年はお参りする人の姿を見ることが少なくなりましたが、水害を知る人は、「この頃は、あんまり参ってくれんようになってしまったが、大水のことは、忘れたらあかんと思います。」と語っていました。

本年、令和元（二〇一九）年は、台風十九号によって日本各地で記録的な大雨による被害が発生しました。そのような中、この水除経王塔が建立から二〇〇年目を迎えたことから、令和元（二〇一九）年一〇月に地元住民らの手によって新たに石塔を設置して経石を納め、この地域で過去に発生した災害を振り返り、防災意識の向上を図りました。

■参考文献
『萩原の民俗信仰と芸能』　平成二年　萩原町教育委員会
『萩原町史　近世編』　平成十五年　萩原町
『岐阜県の地名』　平成元年　平凡社
「下呂市の文化財」パンフレット　下呂市教育委員会

下呂市の災害対策

V字谷を下ってきた飛騨川は、下呂市で平坦地に流れ出るため、しばしば氾濫して大きな被害を出してきました。

一方で背後に山地が迫り、土砂災害が多発してきた地域でもあります。記録上の大規模災害には、安永元（一七七二）年の「下呂抜け」と安永五（一七七六）年に数百箇所で山崩れが起こったという「下呂の八百八抜け」があります。

平成三十（二〇一八）年六月二十九日の豪雨では、萩原地域において農地・農業用施設、山地・林道、鉄道施設等に大きな被害が見られ、特に上呂では山腹が崩れてJR高山線の線路に土砂が流入し運休が続きました。

これらの被害を受け、下呂市では浸水想定区域と土砂災害危険区域を併記したハザードマップを現在作成中しています。

二つの要素を併記することで、災害時の避難所設定や避難経路の選択などで安全度の向上が期待されます。

JR高山本線の被災状況（下呂市萩原町上呂地内）
＜出典：平成30年7月豪雨による被害概要
（6月29日からの大雨による被害）（岐阜県）＞

飛騨川支流・馬瀬川の環境保全と地域振興

高山市清見を発し、馬瀬山脈と和良山脈に挟まれた下呂市馬瀬を南流して下呂市金山で飛騨川に注ぐ馬瀬川は、全長六十七㎞、飛騨川第一の支流です。最上流部の高山市清見では、いくつかの小平野に集落や耕地が見られるほかは峡谷となっており、馬瀬では約二十八㎞の間、五〇〇m内外の河谷平野をつくって流れます。

旧馬瀬村は、平成十六（二〇〇四）年に益田郡四町一村が合併して下呂市になった村で、村域の九十六・一%を山林が占め、過疎化が進む典型的な山村でした。

本稿では、近年、馬瀬川沿川で取り組まれている環境保全と地域振興について紹介します。

「日本で最も美しい村」馬瀬でも棚田景観がよく残る西村集落
〈提供：下呂市役所馬瀬振興事務所地域振興課〉

一．馬瀬川沿いの山村・馬瀬村

馬瀬は、周囲を八〇〇～一，〇〇〇mの山々に囲まれ、他所との通行はすべて峠越えとなる地域で、縄文遺跡は点在していますが、古代・中世の記録は少なく、集落によって源氏ゆかりの者が開いた村であるとか、平家の落武者が住み着いたといった伝説が伝わるだけです。

伝承としては、平治の乱（一一六〇年）で破れた源義平（よしひら）が父・義朝（よしとも）に命じられ、兵を募るため飛騨に赴いた際、拠点としたのが中切（村の中程・馬瀬川左岸）の岩魚谷城であったといわれ、この地の氏神貴船神社は義平建立と伝えられています。

馬瀬川は、標高差一四〇mの急流で荒瀬、渕、トロ瀬の繰り返しが変化に富み、また全国的にも有数の清流で、平成の名水百選に選ばれており、特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しています。アユ・イワナ・アマゴなどの渓流魚が多く生息し、かつては漁を生業にしていた人もいたと言われ、明治六（一八七三）年の調査ではイワナ（三〇〇匹）・ウグイアマゴ（三，〇〇〇匹）・アマゴハエ（二，五〇〇匹）の漁獲が報告されています。

「落ち鮎」の習性を利用した清流馬瀬川火ぶり漁
〈提供：下呂市役所馬瀬振興事務所地域振興課〉

馬瀬には、竹ざおにつるした松明を揺らしながら川の中を移動し、驚いて逃げる鮎がしかけた網にかかるという伝統的な鮎漁法「火ぶり漁」が伝わっています。昔はこの土地の風物詩だったこの漁法は一時途絶えていましたが、地域振興につなげようと平成二十四（二〇一二）年に観光向けに復活しました。夜の川面を照らす松明の炎と「ホーホー」という川漁師の掛け声が山峡に響いて幻想的な光景をつくりだしています。

二．「馬瀬川エコリバーシステム」と地域振興

馬瀬村の主な産業は農林業でしたが、農業は経営面積が零細で、林業も採算がとれず間伐が滞っていました。村では地域振興策として馬瀬川の鮎釣りを中心とした観光開発に取り組みました。馬瀬川は鮎釣りが全国的に人気の川で、シーズンには多くの釣人が訪れます。村では鮎釣りのPR活動やキャンプ場の開設、平成八（一九九六）年には第三セクターによる温泉施設「美輝の湯」を開業、一時は年間三十万人の観光客が訪れるリゾート地となりました。

昔ながらの山村風景が残る数河地区
〈提供：下呂市役所馬瀬振興事務所地域振興課〉

しかし、観光客の増加は、馬瀬川の汚染などのマイナス面ももたらし、自然環境が損なわれる懸念が持たれるようになりました。村は「自然と共生した村づくり」を標榜して研究会を立ち上げ、馬瀬川を中心に川・森林・人・農地が一体となって、馬瀬の風土や景観を生み、住民に恩恵をもたらしているとして「馬瀬川エコリバーシステムによる清流文化創造の村づくり構想」を策定し、自然や文化などの健全な存続と、地域の経済振興の両立を目指しました。

この構想に基づき、フランスの「地方自然公園」を視察・調査し、住民主体で環境の保全を図りながら観光や農林業の振興、伝統文化の継承につながる地域づくりを学んできました。平成十六（二〇〇四）年の町村合併では、馬瀬が取り残される不安も囁かれるなか、閉村式の席上で「馬瀬地方自然公園」の設立が宣言されました。

これより馬瀬の地域づくりは馬瀬地方自然公園を看板に進められていきます。住民憲章には観光振興も盛り込まれ、民泊サービスの工夫、地元食材の活用など自然と調和した観光資源の開発が一定の成果を出してきました。しかし、観光施設の建設などの即効性が期待できる施策と違い、新しい試みは担い手に高度なスキルが要求され、収益率も高いとは言えません。

そうした中で、馬瀬の銘柄米「馬瀬ひかり」が県の最高基準をクリアし、品評会で高評価を得たのを契機に、ブランド米として需要が増大し、地区には遊休農地が少なくなりました。農地は美しい馬瀬の景観を構成する不可欠な要素で、遊休農地は景観保全の障害でした。耕作放棄による農地の荒廃は全国的に大きな問題となっており、小さな山間地が問題の解消の糸口をつかんだに至ったのは大きな成果といえます。

馬瀬の銘柄米「馬瀬ひかり」

三、渓流魚付き保全林の指定

「馬瀬川エコリバーシステムによる清流文化創造の村づくり構想」では渓流釣りなど馬瀬川の活用が大きなウエイトを占めています。村では釣りのマナーや川の楽しみ方を教える人材を育てる「川のインストラクター」養成講座を平成八（一九九六）年から始めました。また、平成一五（二〇〇三）年から釣りを通して魚を育む森や川などの知識も学ぶ「馬瀬川フィッシングアカデミー」を開催しています。

一方、渓流魚の生息環境を守るためには、護岸をコンクリートから、より自然に近いものに変えるなどの川の環境保全だけでなく、水を生みだしている森林を適切に保全することが重要とする考え方が深まりました。

森林は、豊富な水を蓄え、土壌で濾過され川に出てくる水は、プランクトンを育む栄養素が豊富です。また、川へ流出する土砂を抑制し、魚の生息環境を維持しています。森林では魚の餌となる昆虫が育ち、川に落ちた樹木の落葉は水生昆虫の餌や魚の営巣材料になります。

こうした森林の機能を高めるには、伐採の制約、間伐の励行、広葉樹の保護などが求められます。村は主要な渓流とその周辺の森林を調査し、保全が必要な森林を「渓流魚付き保全林」として指定することとし、平成十四（二〇〇二）年に六ヶ所の森林を候補地としました。この森林の所有者約一〇〇名に村の規則（条例・要綱）を定めて保全に取り組みたい旨を伝えましたが、所有者からは趣旨には賛同するものの、所有する森林が規則で制約を受けることに抵抗があるとの意見が多くあがりました。そこで村が一定区域を保全林に指定し、「森林の育成管理の方針」を示し、森林所有者はこれを尊重して森林施業を行うこととしました。

保全林の上流部では民有林に隣接して国有林が広がっており、渓流魚付き保全林としての機能を果たすには国有林も同じ施業を実施してもらいたいとの声があがりました。村は森林管理署と協議をかさね、国有林についても渓流魚付き保全林の趣旨を尊重した森林施業を実施することに合意し、平成十五（二〇〇三）年には覚書の調印がなされました。国有林と民有林と合わせた面積は、馬瀬の森林面積の二十％にのぼる広大な面積となっています。

渓流魚付き保全林では森林の育成管理の目標として、できるだけ皆伐を避け、下刈り、除伐などの保育、間伐を励行、渓流から三十ｍ以内の森林はできるだけ択伐とし、広葉樹の保存に努めることとしています。

理想的な姿で渓流魚付き保全林を管理運営するためには、森林と渓流魚の生息に関するデータを蓄積し、それを森林施業面に反映する地道な努力が求められます。幸いなことに、平成十九（二〇〇七）年に開催された「利き鮎会スペシャル in TOKYO」でグランドチャンピオンに輝きました。また平成二十（二〇〇八）年には、馬瀬川上流が環境省の「平成の名水百選」に選定され、馬瀬川の清流保全の努力が目に見える形で評価されつつあります。

馬瀬川渓流魚付き保全林位置略図
〈提供：下呂市役所馬瀬振興事務所地域振興課〉

馬瀬川渓流魚付き保全林（名丸くるみ淵）
〈提供：下呂市役所馬瀬振興事務所地域振興課〉

■参考文献
「岐阜県馬瀬地方自然公園と渓流魚付き保全林について」　二〇〇九年　小池永司
『日本地名大辞典・岐阜県』　昭和五五年　角川書店
『岐阜県の地名』　平成元年　平凡社

地域と河川　第七編

七郷輪中を取り巻く諸河川の改修

― デ・レイケが設計したカルバート その２ ―

桑名市多度町の東部に位置する七郷輪中は、揖斐川右岸最下流部の輪中であり、「七郷」の名称の由来は輪中内の七つの郷から成っていたからです。

安藤萬寿男は、七郷輪中の成立について、慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦い直後から開発が始まり、十七世紀前半にはその大部分の開発が終わったと述べています。

本稿では、二回の御手伝普請時による香取川への工事計画に触れた後、七郷輪中への明治改修時の計画と現状、デ・レイケとの関わりについて記述します。

二郷橋から上流方向に見た多度川（右）と肱江川（左）

一．江戸時代の工事計画

七郷輪中は、東端を揖斐川に、他の三方を香取川に囲まれた輪中でした。つまり、揖斐川の右派川香取川は、七郷輪中の北端から輪中西端を流下した後、西から流れ出る山除川・多度川・肱江川と合流して揖斐川右岸に注いでいました。

七郷輪中は桑名藩に属していましたが、宝永七（一七一〇）年の野村増右衛門による「野村騒動」で、十一万石の桑名藩主松平定重が越後高田へ領地替えとなり、替わりに備後福山の松平忠雅が十万石で桑名藩主となりました。

この領地替えで生じた一万石分の一部として伊勢国側の七郷輪中は幕領となり、以後、明治維新まで続きました。

（一）延享の御手伝普請

延享四（一七四七）年十一月、木曽三川下流域で最初の御手伝普請が二本松藩（現福島県二本松市）に命じられ、工事は翌延享五（一七四八）年一月に着手し、同年三月に竣工しました。

この御手伝普請の目的は、

①現羽島市下中町石田付近で杭出し猿尾を設置して木曽川本流の流れを佐屋川に刎ねて木曽川の水量を減らし、

②後に千本松原で知られる油島新田・松之木間に杭出しを設置して、揖斐川への木曽川の影響を減じ、

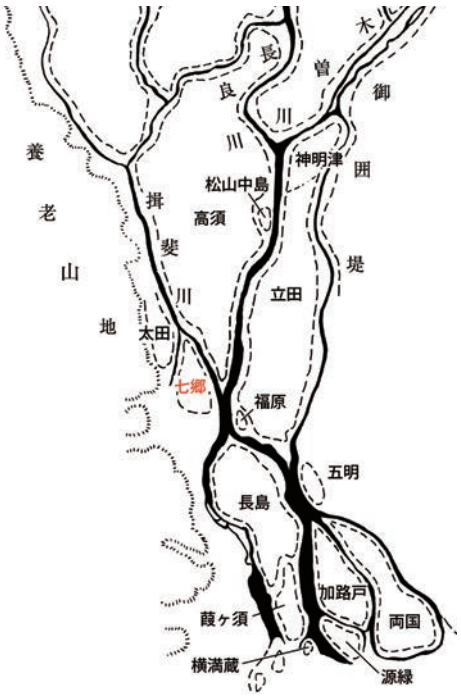
③さらに揖斐川の疎通を改良するために、香取川の付洲を掘割り、揖斐川の洲浚いを行うことでした。

この時、工事を統括する「御元小屋」が七郷輪中の上之郷村に設けられました。香取川での洲浚いは、合計約三・五㎞区間で土量約五八、四〇〇㎥が浚渫されました。土砂の一部は築堤に使用されましたが、殆どが堤内地の嵩上げに用いられました。

つまり、揖斐川上流部や養老山地の谷からの土砂流出が多く、揖斐川や香取川の天井川化によって、相対的に輪中内の耕地が低くなっていたのです。

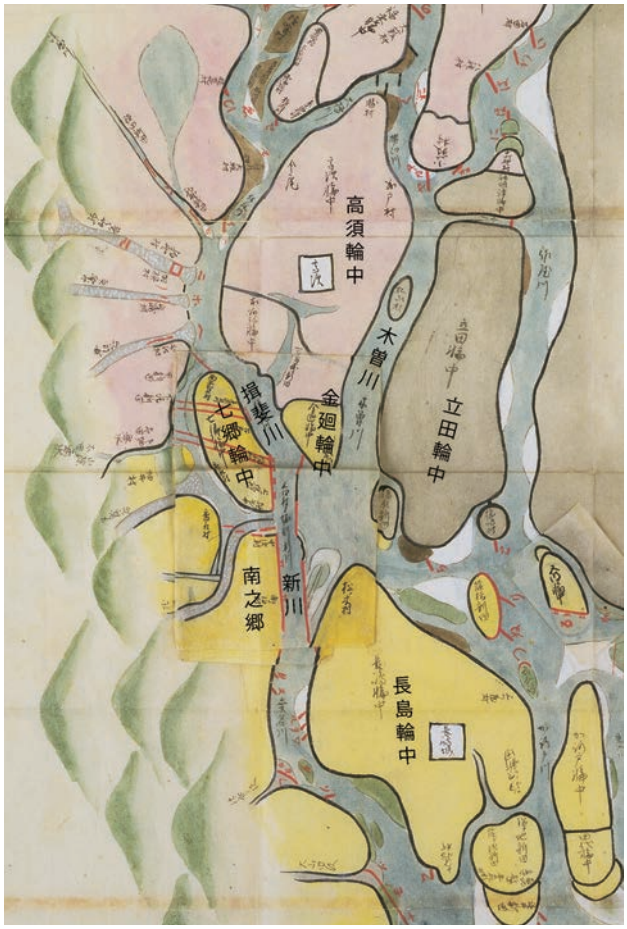
（二）宝暦治水

宝暦四（一七五四）年二月から翌五（一七五五）年五月まで、薩摩藩が二回目の御手伝普請を行いました。



明治改修前の輪中分布図
〈出典：川とともに生きてきたⅡ〉

延享５年濃勢州川々御手伝普請絵図（加筆）
〈出典：多度町史資料編２近世付図〉



普請目論絵図（部分）に加筆
〈出典：名古屋大学付属図書館蔵・髙木家文書〉

CC BY SA

調査段階では、揖斐川の疎通改善のために香取川を締め切り、揖斐川新川左岸の堤防を金廻輪中（現海津市海津町）から南之郷村（肱江川右岸側で現桑名市多度町）・長島輪中（現桑名市長島町）と結び、新川右岸の堤防は七郷輪中と南之郷村の一部分を引堤して利用する案等が提案されました。

しかし、これらの案は多くの「潰地」を生じさせ、さらに新川の勾配が緩くてあまり疎通が改善されないと結論付けされたため、油島新田と松之木村間に開口部を伴った油島締切工事が施工されました。

二．明治改修工事

（一）明治期の出水

明治二十九（一八九六）年七月の出水は、岐阜県下全域に大きな被害を及ぼし、大垣城の天守閣の石垣も水に沈みました。

同様に七郷輪中でも香取川沿川で、多度町香取の堤防決壊で水害家屋二三〇余戸・浸水田畑三〇〇町歩、多度町平賀の堤防六十間が決壊し、流失家屋二戸・浸水家屋二三九戸・田畑浸水三六〇町歩となりました。

また同年八月三十日の暴風雨で、揖斐川・多度川・肱江川の堤防が各所で決壊し、七郷輪中は一面泥海と化し、同年九月の暴風雨では、肱江川が多度村で破堤し、多度町肱江など三大字と多度町香取が水に沈みました。

さらに翌明治三十（一八九七）年九月にも、肱江川の上下流三ケ所で堤防が決壊し、多度川では多度町香取で決壊して多度町戸津へ浸水していました。

このように続く破堤の原因として、この地域の土砂流出の多さが挙げられ、明治改修に先立つ最初の砂防工事が明治十一（一八七八）年四月に肱江川流域の御衣野村で行われていました。また、明治二十四（一八九一）年十月に発生した濃尾地震後の土砂流出の増大も影響していたと考えられます。

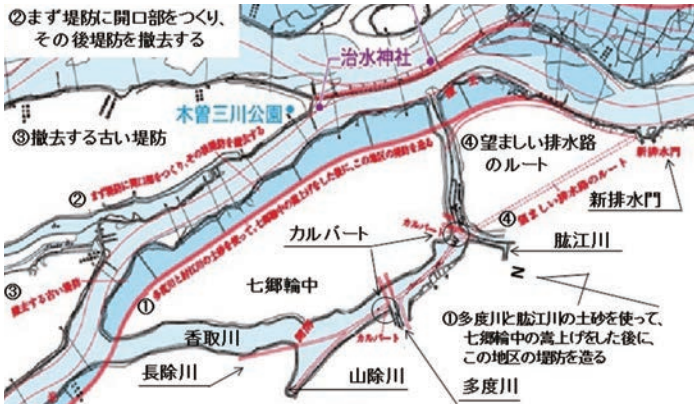
（二）七郷輪中の明治改修計画

木曽川文庫に展示されている「木曽三川改修計画図」には、計画堤防線は赤線、河川名や地名はローマ字で書き込みがされていますが、最近になり、新堤防線の赤線の中や旧堤防沿い等に赤字の小さな英字が書き込まれていることが分かりました。

左図は、これらの英字を日本語（赤文字）で、旧河道を薄い水色で、新河道を濃い水色で書直し、さらに位置関係が分かりやすいように現在の施設を水色で加筆した七郷輪中周辺の工事計画図です。

同図より、二六〇年以上前に行われた宝暦治水の際に計画されたものと同様に、香取川の廃川と揖斐川右岸堤の引堤が計画されています。

さらに、長除川（ながよけがわ）（図中に河道は描かれていない）と、養老山地の扇状地を流れる伏流水を水源とする山除川（現在は旧香取川合流点から北上して揖斐川に注いでいる）とを新水路で南流させ、多度川と肱江川をカルバートで横越して、「望ましい排水路のルート」の新排水路で現大鳥居排水機場（多度町大鳥居）辺りで揖斐川右岸から排水する計画となっています。



「木曽三川改修計画図」の新河道を濃い水色、旧河道を薄い水色で区別し、英文を日本語に直し、現在の地点名も加筆した図〈木曽川文庫蔵〉

①揖斐川右岸の引堤

揖斐川右岸の新設堤防沿いには、赤字で「多度川と肱江川の土砂を使って、七郷輪中の嵩上げをした後に、この地区の堤防を造る」、さらに旧右岸堤に沿って「まず堤防に開口部を作り、その後堤防を撤去する」と、引堤の手順が記されています。

つまり、デ・レイケの計画では、七郷輪中内の耕地を多度川と肱江川からの流出土砂で嵩上げした後に、右岸堤を引堤する計画でした。しかし、日清・日露戦争に起因する予算不足や輪中内への土砂堆積を許容する時間のゆとりが無かったためか、二ケ所のカルバート設置と流出土砂による嵩上げは行われませんでした。

明治改修の第三期（明治三十三（一九〇〇）年～三十八（一九〇五）年）工事として行われた引堤は、七郷輪中の引堤約四・〇㎞と南之郷

油島大橋から見た引堤跡

七郷輪中の航空写真

（揖斐川右岸側）の引堤約九一〇mでした。

この引堤によって、七郷輪中で約六十ha、南之郷で約十haが堤外地となり、この区間の村の戸数は、明治十六（一八八三）年の三一二戸から同三十一（一八九八）年には二三八戸に減少しました。例えば南之郷では、全六十二戸中、村内堤内地への移転が二十四戸、村外への転出が二十二戸にのぼりました。

引堤に際しては、秋冬の流水が少ない時期に、浚渫や旧堤撤去による土砂で直ちに旧堤内地に新堤を築造する必要があり、引堤長約四km区間で土砂量五四・二万㎥の引堤は大変な工事であったと思われます。

②香取川の廃川

当初の計画では、香取川の支川を新排水路に集めて輪中下流部から排水する予定でしたが、香取川の完全な廃川区間はほぼ中央の河道部分だけとなり、旧河道の上・下流部は新支川の河道に使用されました。

すなわち、完全廃川区間は、国道二五八号線が山除川と交差する付近から多度川が旧香取川に合流する地点（現新多度橋付近）まで、この香取川跡地は五・六〇町歩になります。なお、多度川が旧香取川と合流した地点から下流の旧河道は、多度川が約八〇〇mを流下した所で、北流して来た肱江川と背割堤で並流して、二郷橋を経て揖斐川に注いでいます。

一方、山除川と旧香取川との合流点より上流部の旧河道は、山除川の新たな下流部として、旧河道を北流する形で勢濃排水樋門から揖斐川へ流れ出ています。なお、改修以前に長除川が山除川に合流していた合流点（南濃町境付近）を、改修後は逆に長除川の分派点に変更し、長除川を山除川と同様に北流させ、南部排水機場から揖斐川へ排出しています。

揖斐川河岸に造られた勢濃排水樋門

三．木曽川下流増補工事

河床上昇の例として、例えば、揖斐川沿いの海津市平田町今尾付近の河床は、濃尾地震に起因する土砂流出などによって、明治三十九（一九〇六）年からわずか二十四ヶ年で平均〇・五mも上昇しています。このような河床上昇により、下流域沿川の低湿地での自然排水が困難になり、内水被害が増加しました。

そこで、木曽川下流増補工事の一環として、昭和十一（一九三六）年から揖斐川堤防の拡築、狭窄部の引堤、支川合流点の引き下げなどが行われました。

七郷輪中周辺では、多度町古敷から多度町大鳥居間約五・二kmの河道浚渫や大鳥居地先約〇・五kmの護岸が施工されました。一方、東に位置する高須輪中からの悪水排水に対する大江川の引き下げは行われましたが、第二次世界大戦による予算不足のためか、土砂流出の多い肱江川の引き下げ工事は行われませんでした。

南郷排水機場から見た揖斐川

四．設置されなかったカルバート

七郷輪中の西端を流下していた香取川は、疎通を改善するために、延享五（一七四八）年の御手伝普請で浚渫が行われ、宝暦治水で廃川が検討されました。その後、約一五〇年を経た明治三十三（一九〇〇）年代に香取川は廃川となりましたが、その旧河道利用はテ・レイケの計画とは異なる内容でした。さらに昭和初期の木曽川下流増補計画によって、旧香取川の支川肱江川の合流点引き下げ工事が計画されましたが、この工事でも実現しませんでした。

明治改修工事で多くの支川が廃川となりましたが、廃川による旧香取川の河道利用は、明治や昭和の予算不足によって、計画が大きく異なったと考えられます。

余談ですが、明治十三（一八八〇）年にテ・レイケは、籠手田（こてだ）滋賀県知事に高時川を横越する「田川カルバート」（KISSO Vol.112 歴史記録に記載）の設置を提案しており、このカルバートは現在も改築を経て利用されています。

もし、七郷輪中にも計画図に書かれた二ケ所のカルバートが設置されていたなら、どのような形状・構造になっていたか興味が尽きません。

■参考資料
岐阜県『岐阜県治水史』
上・下巻　一九五三年
多度町『多度町史』
資料編三　近代・現代　二〇〇三年

昭和２年の木曽川

美濃加茂市民ミュージアム　館長　可児光生

木曽川の中流域の開発は、大正初めに著名な地理学者・志賀重昂（しげたか）によって日本の「ライン」と風景が絶賛されたこと、昭和二（一九二七）年、新聞社が企画し全国的に大きな盛り上がりをみせた「日本新八景」で「木曽川」が一席選定されたこと、この二つの大きな評価を経て、飛躍的進展をみせていきます。

「われ等の新しい好尚」と国民個人レベルの参加意識と郷土愛をくすぐり、「昭和」という新しい時代の幕開けに合わせて企画された日本新八景と木曽川のかかわりについて紹介します。

志賀により日本の「ライン」と絶賛された犬山城下の木曽川

一．日本新八景の募集

大阪毎日新聞と東京日日新聞は、昭和二（一九二七）年四月九日の紙面に次のような社告を大きく掲載しました。

「日本新八景」の選定

選定八景　山岳―浅谷　瀑布　温泉　湖沼―河川　海岸　平原

各第一勝を募る

「日本新八景」の投票と選定方法

主催　東京日日新聞社　大阪毎日新聞社

後援　鐵道省

「日本新八景」選定の社告〈出典：愛知県図書館蔵〉

「輝かしい自然、美しい山水、われ等日本が持つ大きな誇りは何？、その自然美を高唱し得るとは、われ等の大いなるよろこびであります。けれども、これまで名勝といひ、勝景と呼ばれてゐたものの多くは全く古人の一部の趣味と、片寄った鑑賞とによって定められたもので、われ等の好尚を代表すべく餘りに隔たりがあり過ぎます。昭和の新時代を代表すべき新日本の勝景は宜しくわれ等の新しい好尚によって選定されなくてはなりませぬ。これ本社がこの昭和に時代の初頭において「日本新八景」の選定を江湖にはかるゆゑんであります。さてその選考方法を發表すると共にあまねく皆さんとこの計畫を遂行せんことを期するものであります。」（大阪毎日新聞、東京日日新聞　「選定告知社告」昭和二（一九二七）年四月九日）

「日本新八景」の選定を広く国民に募集するお知らせです。前年の十二月に大正天皇が没し、日本国中が悲しみに沈んでいましたが、昭和の幕開けを新たな企画とともに前進していくという趣旨で新聞社は「日本新八景」の募集を全国に呼び掛けました。新時代への膨らむ期待が感じられます。

「東京朝日」「大阪毎日」「東京日日」など主要全国紙は、大正十一（一九二二）年から翌年にかけて普通選挙実現のキャンペーンを張りました。その動きは昭和三（一九二八）年の普通選挙の実施として結実することになります。

また大正十三（一九二四）年には、婦人参政権獲得期成同盟会の創立に象徴されるような女性地位の向上の要求の動きが始まるなど、大正の後半から昭和の初めは、大正デモクラシーという民主化の大きな潮流が全国に広がりを見せていく時期でもありました。

さて、この社告の文面からは、これまでは文人だけが称賛し愛でる対象であった名勝や景勝の地を、「われ等」すなわち、一般国民の身近なものにしていくという考え方が見えてきます。そして昭和という新時代を迎え、国民自らが社会の主体となるべきだという理念が感じられます。

社告本文に続き選定方法や選定後のことについて八項目ほど上げていますが、注目されるのは「新八景は鉄道省において公認し種々の方法によって永くこれを紹介する」「入選八景地に地名文士と書家を派しその紀行文並にスケッチを東京日日、大阪毎日両紙上に連載する」という二項目です。

新聞社としては、新八景を選定するだけにとどまらず、鉄道省にも関わりを持たせ、いわば国策として国民の旅行や観光に力点を置こうとしました。そして、文士と書家を選定地へ派遣し紀行文などを描かせて国民の旅行気分を盛り立てていくという、極めて戦略的なキャンペーンでした。国内では鉄道交通網の発達や生活の豊かさに伴って、国民の間では旅行ブームが起

きていました。

外国人観光客誘致を目的として明治四十五（一九一二）年に設立された「ジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTB）」はこの年、協賛企業からの収入を邦人向けの旅行代理業務手数料収入が上回るようになりました。国内旅行の需要の高まりを象徴しています。

二．熱狂する国民

昭和二（一九二七）年四月に八景の募集が始まると、たちまち大きな反響を呼び起こしました。最終的に投票総数は九千七百万通にのぼりました。当時の人口六千万人で一年間に流通する葉書が約一億通だったといわれます。それに匹敵するはがきが、たった一か月余りで押し寄せたのです。

募集開始後、地元の候補地を当選させるために県知事が自ら先頭に立って運動をしたり、入選期成同盟会を結成して大量の組織票を集めたりするなど、八景選出は全国民を熱狂の渦に巻き込む一大イベントになりました。この時代が個人の意見や考えを投票で示すという生活行動の変化の時でもあったことと、郷土の誇りやアイデンティティとして風景を位置づけようとしたことが背景にあると思われます。

五月二十日に、国民のはがき投票が締め切られます。七月六日にその投票数などをもとにした推薦候補地が数点選出され、その中から審査員によって各分野で次のように一席が選ばれました。

○（山岳）雲仙岳
○（渓谷）上高地渓谷
○（湖沼）十和田湖
○（海岸）室戸岬
○（河川）木曽川
○（平原）狩勝峠
○（滝）華厳瀧
○（温泉）別府温泉

日本八景選定後の新聞社による記念写真入り封筒（左）と木曽川の記念写真（右）

三．自然地理学的評価

募集翌月の五月十三日付けの紙面には、審査委員の名簿が発表されました。そこには、本多静六、田村剛、田中阿歌麿、小川琢次、脇水鐵五郎といった林学者、地理学者や地質学者が名前を連ねており、選考にあたって自然科学的な観点が重視されていることがわかります。国立公園の父とも呼ばれる田村剛は、「自然公園」を提唱し、昭和六（一九三一）年の国立公園法の成立に尽力した人物です。八景に選ばれた景勝地の多くは、昭和九（一九三四）年以降の国立公園指定につながっていくことになります。

さて、河川の部のはがき投票の一位は百十万票を獲得した「長良川」でした。ところが九十三万票で三位であった「木曽川」が審査委員の選考によって逆転し一位となったのです。詳しい経緯は不明ですが、審査委員の一人である地理学者・本多静六は、この一〇年ほど前に木曽川を次のように評しています（注1）。

「有体に謂へば日本ラインの景は正に是れ京都嵐山の景を縦横数倍に拡大したるものと云ふべく或は又欧州ラインの風景に更に東洋山水画風の技巧を加味したるものとなすを更に適評と云ふべし。要之日本ラインの山水美は直に是れ自然の神が幾億万年を費して造り成したる精巧無比なる一大美術にして最早之に何等人工美を加ふるを要せざる也…」

木曽川を日本の「ライン」と絶賛した地理学者・志賀重昂の影響も受け、本多は単なる風光明媚だけでなく自然地理学的観点と世界的視点から極めて高く評価していました。審査を左右する実力者であった本多の見解が最終審査に影響を与えたことも十分考えられます。

日本ライン下りのポイント（可児川との合流点）

四．北原白秋が見た木曽川

北原白秋は、選定後に新聞社の依頼を受けて木曽川を訪れ、八景選定企画として次のような紀行文「日本八景をめぐりて」を東京日日新聞に寄せました（注2）。

「（前略）斎藤拙堂の「岐蘇川を下るの記」に曰く

「石皆奇状両岸に羅列す、或は峙立して柱の如く、或は折裂して門の如く、或は渇驥の澗に飲むが如く、或は臥牛の道に横たはる如く、五色陸離として相間はり、皴率ね大小の斧劈を作す、間ま荷葉披麻を作すものあり、波浪を濯ふて以て出づ、交替去来、応接に暇あらず、蓋し譎詭変幻中清秀深穏の態を帯ぶ。」

兜岩、駱駝岩、眼鏡岩、ラン（ママ）オン岩、亀岩などの名はあらずもがなである。色を観、形を観、しかして奇に驚き、神悸き、気眩すべしである。

拙堂も観た五色岩こそまた光彩陸離として衆人の眼を奪ふものであらうか。

ただ私の見たところでは、この蘇川峡のみを以てすれば、その岩相の奇峭は豊の耶馬渓、紀の瀞八丁、信の天竜峡に及ばず、その水流の急なること肥の球磨川に如かず、激湍はまた筑後川の或個處にも劣るものがある。これ以上の大江としてはまた利根川がある。

ただこの川のかれらに遙に超えた所以は変幻極まりなき河川としての綜合美と、白帝城の風致と、交通に利便であつて近代の文化的施設の余裕多き事であらう。原始的にしてまた未来の風景がこの水にある。（後略）」（昭和二（一九二七）年八月三十日付東京日日新聞）

白秋は、江戸時代の文人である斎藤拙堂が評したように木曽川の奇岩などを鑑賞の対象として認めつつ、新たな視点を木曽川に吹き込みま

した。それは、「河川の総合美」「白帝城の風致」「交通に利便」でした。風景や自然景観を総合的に捉え、交通網などの利便性を含めた将来の可能性も観光資源の要素として位置づけようとしたのです。現代の観光との共通点をここに見るような気がします。

この記事で、白秋は木曽川のことを「蘇川峡」と独自に名付けていることに注目します。また、昭和二年八月二十八日の記事（木曽川（二））【左写真】では、白秋は地元の人との会話について、

「日本ラインという名称は感心しないね。毛唐がライン河を仏蘭西の木曽川とも蘇川峡とも呼ばないかぎりはね。お恥ずかしいぢやないか」

「さうですとも、日本は日本で、ここは木曽川でいい筈なんで」

木曽川橋畔の雀のお宿の主人野田素峰子が直ぐと私に和した。

「みんながよくさう言ひますんで」

と書いています。「日本ライン」という「ハイカラ」な呼び方に対して白秋は不快感を示し、日本古来の名称にこだわりを持っている様子がうかがえます。

また同日のこの記事では、

「昔と今と、変われば変わるものだと、私は思ふ、さうだ、あの頃はまだ日本ラインといふ名すらさして知られてなかったのだ」

と記し、木曽川が「日本ライン」と呼ばれるようになった今の時代を感慨深く述べています。

昭和二（一九二七）年の八景投票に際し、「日本ライン」は渓谷ですか、河川ですか。」という質問が投票者から寄せられました。それに対しての新聞社からの回答は「日本ラインという名称はありませんから、木曽川として、河川の部に取り扱います。」でした。

このやりとりは、投票対象の八景の区分と定義が明瞭ではなかったということを表していること、そして木曽川に対しての「日本ライン」という呼称が、この頃国民の間で一定の定着をみせていたことを想定させるものです。

五．風景の大衆化

日本八景として「お墨付き」が与えられた木曽川の観光は、これをきっかけにして大きく進展をみせていくことになります。直後の天皇行幸もあって皇族や海外から賓客などの訪問も多くなりました。

日本八景をめぐりて（27）

木曾川（二）

北原白秋

白帝城（2）

東京日日新聞に寄せられた北原白秋紀行文「日本八景をめぐりて」（昭和２年８月27日付）
〈出典：愛知県図書館蔵〉

「ライン下りは太田から」ポスター（昭和３年）

可児郡土田（とだ）、加茂郡の太田や古井（こい）、坂祝（さかほき）の各乗船地から犬山城まで遊船を楽しむ客が増え続け、日本を代表する観光地「日本ライン」として活況を呈します。

八景をめぐる地域の人々の動きは、「風景」がより身近に楽しめるものとして大衆化されていくことでもありました。八景選定直後の昭和二（一九二七）年五月からの「愛知縣下新十名所」、「三重縣下避暑地」（同年七月）、「岐阜縣下新十名所」（同年一〇月）と地元新聞社によって県ごとの名所選定が行われ、日本八景同様大きな盛り上がりを見せました。

古来の概念から脱し、国民自らの手によって名所を創出していくという新たな動きが、昭和という新しい時代の幕開けとともに起きたのです。

（注1）本多静六『日本莱因風景の利用策』大正八（一九一六）年。

（注2）「木曽川（一）～（九）」（昭和二（一九二七）年八月二十七日～九月四日）。いずれも後に、北原白秋『旅装読本』昭和十一（一九三六）年に「日本ライン」として所収。

昭和二～三年の動き

昭和二（一九二七）	二月十日	それまで木曽川を渡船していた太田に太田橋が完成する。また、この年、飛騨川の青柳橋が鉄橋に架け替えられた。
	四月六日	志賀重昂没（六十三歳）。
	四月九日	日本新八景の応募始まる。
	五月二十日	日本新八景のはがき投票が締め切られる。
	五月二十日	「愛知縣下新十名所」募集開始。
	七月六日	新八景の決定発表。河川の部で木曽川が選ばれる。
	七月十二日	「三重縣下避暑地」募集開始。
	八月二十七日	新八景決定に関連して木曽川を来訪した北原白秋の紀行文の新聞掲載始まる（九月一日まで）。
	十月九日	「岐阜縣下新十名所」募集開始。
	十一月二十日	陸軍特別大演習で愛知県を訪れた昭和天皇が、犬山城ほか各訪問。
	十一月二十日	犬山においてガイドブック『日本八景木曽川探勝案内』が発刊される。
昭和三（一九二八）	四月	可児郡土田の大脇湊からのライン下りの乗船客が急増。乗り場である北陽館と名古屋鉄道のライン遊園の間にバス運行開始される（名鉄のバス事業の最初）。

■参考資料
「日本八景の誕生」『環境イメージ編　人間環境の重層的風景』　白幡洋三郎　弘文堂　一九九二年
「風景の大衆化と「郷土」」『岐阜史学』一〇四号　可児光生　岐阜史学会　二〇一五年

さめがいの孝子池（下呂市馬瀬）

むかし、川上村に夫婦と一人の子供が住んでいました。
父親は木地師を生業にしていて、息子も小さいころから父親について仕事を覚えていきました。息子が一人前の職人になったころ、父親は重い病にかかり、
「母を大事にして、りっぱな木地師になってくれ」
と言い残して亡くなりました。
息子は母親を労りながら、一日も休まずろくろを廻して木を削り、遠方から注文がくるほどりっぱな職人になりました。村の人たちの間でも、母親思いでよく働く若者と、評判になりました。
しかし、母親も病気がちになり、やがて病の床についてしまいました。息子は母親の病にきく高価な薬を手に入れたい一心で、いっそう仕事に励みました。
ある夜、母親の容態が急に悪くなり、そのまま朝になりました。
「美しい朝じゃ。私が育った里の朝もこのように美くしかった。里には病を治すといわれる湧き水があったなあ。死ぬ前にあの水が飲みたいものじゃ。」
目を閉じたまま、うわごとのように母親がつぶやきました。
息子は母親の看病を村の人に頼み、母親の故郷、さめがい（滋賀県の醒ヶ井）に向かいました。湧き水は村はずれの森で湧きでており、息子は水を汲み、急いで来た道を駆け戻りました。
村はずれに村の人が迎えにきていて、
「今しがた母親が息をひきとった」
と告げました。息子は、その場に崩れ落ち、その拍子に腰につけていたひょうたんから水がこぼれていきました。
次の日、息子がいないことに気がついて、あちこち探しましたが、見つかりません。その代わり、息子が倒れていたあたりに、青々と澄んだ池ができていました。
「これは息子を哀れに思った神様が作りなさった池じゃ。」
村人は、この池を「さめがいの孝子池」とよんで大切にしました。
現在、池はなくなりましたが、岩のあいだから水が湧きでて、近くにお地蔵様が立っています。

出典
『馬瀬村の昔話とうた　村の歴史Ⅰ』昭和五六年　二村利明

ＫＩＳＳＯは、創刊号からの全てが木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。

表紙写真
『下呂温泉の噴泉池』〈提供：下呂市観光商工部観光課〉
下呂温泉街の真ん中を流れる飛騨川の河川敷にあり、加温、注水をしていない源泉かけ流しとなっていますので、夏は若干高め、冬はややぬるめのお湯です。開放的なロケーションの中で下呂の温泉を堪能でき、毎日多くの利用客が訪れています。

編集後記　昨年５月の皇太子殿下行啓を記念して、船頭平閘門に関わるコラム「船ちゃんのこぼれ話」の掲載を始めました。

船（ふね）ちゃんのこぼれ話 第五話

「筏の通過～その③～ 貯木場の閘門」

大正の時代になり、木材運搬法も川から陸路へと移り変わり、船頭平閘門でも、大正７（1918）年をピークに筏は減少していきました。
一方、名古屋港では取扱量が増加した国産・輸入木材を筏に組み運搬するため、貯木場の増設が急務となっていました。
そんな中、昭和2（1927）年現在の名古屋市港区船見町に、八号地貯木場（42万9,000㎡：ナゴヤドーム約32.5倍）が完成しました。ここは当初海水だったことから貯木は不可能と考えられていましたが、出入口に船見閘門を設置することで、海水による害から木材を防ぐことが出来るようになり、更に作業時に干満の影響を受けにくくなるという、画期的な貯木場でした。
また、閘室（水位調整のため筏が入る場所）内への出入りが楽になるよう扉は真正面に向かい合う形ではなく、斜向かいに設置されていました（図1）。
しかし、伊勢湾台風での木材流出を教訓とし、名古屋港での木材関係施設は、西部地区へと変更され、昭和43（1968）年には西部木材港（弥富市と飛島村）が建設されましたが、ここにも木材用閘門として世界に類をみない規模の２基の閘門形状が扁平な六角形の閘門（閘室：30m、長さ92m、扉幅14m）が設置されました（図２）。
閘門の形も、時代の流れとともに色々と変化していますね。

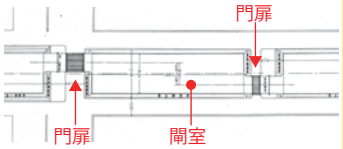


図１：名古屋港八号地貯木場船見閘門
〈出典：名古屋築港誌〉

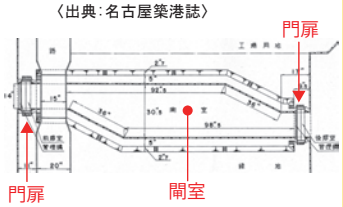


図２：木場金岡追悼貯木場閘門平面図
〈出典：名古屋港臨海工業地帯概要〉

『ＫＩＳＳＯ』 Vol.113 令和２年１月発行
編　集　木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）
発　行　国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所
〒511-0002　三重県桑名市大字福島465
TEL（0594）24-5711　ホームページ URL https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/